

高校野球は18日に開幕する第96回選抜大会から、使用できる金属製バットが、反発性能を抑えた新基準に完全移行する。打球による投手らの負傷事故を防ぐことなどが狙いで、センバツに出場する八戸学院光星、青森山田の青森県

勢2校も昨年から新バットの対応に着手。「芯が狭くなり、打つのが難しい」「機動力を重視するチームが増えるのでは」一。両校は本番まで試行錯誤を続ける。

(千葉達也)

選抜高校野球から新基準に移行

飛ばないバット 対応は

光星、青森山田 試行錯誤



新基準の金属製バットを使って打撃練習を行う八戸学院光星高の選手たち=2月中旬、八戸市

マウンドから本塁までの距離 打球部の肉厚も約3ミリの約4は18・44センチ。投手は投球後、打者との距離が縮まり、その状態で鋭い打球を受けることも少ない。近年は打撃戦が繰り返された選手からは「飛びにくく上げられる試合が増えていて、投手の負担を減らす必要性が指摘されている。」



従来の金属製バット(上)と、新基準の金属製バット

芯で捉える打撃意識

犠打や盗塁を重要視

八学光星の主砲山本優大(2年)は「従来のバットは芯を外しても飛んだが、これからはよりミート力が必要になってくると思う」と率直な感想を口にした。同校は昨秋以降、新基準のバットを10本購入。打撃投手を立てての練習で使用し、バットティンクの感覚を確認してきた。従来のバットで高校通算10本以上の本塁打を放つ山本は「飛ばないバット」への変更は自分たちだけじゃなくて、どのチームも一緒。「打の光星」を見せつけたい」と甲子園でのアーチに意欲を見せる。指揮官たちは変更を冷静に受け止める。八学光星の仲井宗基監督は「打つのが難しいといわれているので、しっかり(バットの)芯で捉えることを意識してティンクやバットティンクなどをさせている。慣れるしかなく、特別な練習はしていない」。投手の攻め方については、詰まった打球が柵越えするようになることはなくなる。内角を攻めるピッチャーが多くなってくるのではないかと変化を予測する。安打や本塁打の数が減ることにより、得点の機会は減るとみられる。青森山田の兜森崇朗監督は試合展開について「コースコアの試合が増えていくだろう」と話し、「犠打や四死球、盗塁、エンドランなどのヒット以外の要素の重要性が増すと思う」と指摘した。守備面では、打ち損じた打球の速度が極端に落ちるため、自分の足を使って取ってさばくことが大切だろう」とみている。